The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	仮名草子の文学観
Author(s)	松原, 秀江
Citation	語文. 1987, 48, p. 81-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

仮名草子の文学観

松原秀江

仮名草子は、室町時代から江戸時代を通じて行われていた言葉である。それは当時、秋の夜長物語のような中世小説から、如儡子・了意などの著作、更には西鶴や一風・都の錦、はた又種彦などの著作に至るまで、使われていた。そして、この「自然発生的な仮名草子の名称」は、現在、西鶴以前の近世小説類を示す言葉として使われるが、この言葉を文学史上の用語として最初に採用した水谷不倒以来の定義の曖昧さから、今日においてもこの語が、小説史上の言葉であるにもかかわらず、随筆類まで含むやっかいな言葉であること、改めていうまでもない。

ところで、仮名草子を定義しようとする際、中世から近世にかけてのこの語の穿鑿をする以外に、江戸期の書籍目録（以後書目と略記）の「仮名和書」、および「舞并草紙」の項をも参照するが、『江戸時代書林出版書籍目録集成』の延宝三年までの上方の部類別書目を見てきた目で、貞享二年刊の『改正広益書籍目録』を見ると、あっと思うような変化がある。それは、延宝三年までの書目では、「舞并草紙」の部門に含まれていた物語名の作品や楽事が、貞享二年版では、「物語類」、及び「好色之類并楽事」として独立し、別項目になっている事である。

『江戸時代書林出版書籍目録集成』を見る限り、寛文十年刊の『増補書籍目録』以来、「舞并草紙」の項に、単に楽事、あるいは楽事色々有とだけ記されてきた遊女、野郎の評判記や艶本の類が、貞享二年版では、より多くの艶本や好色本とともに、「好色之類并楽事」として独立するのは、この書目の刊行者四名の最後に名をつらねる西村市郎右衛門が、当時、仮名草子的な作品を執筆刊行しながら、「西鶴を消す」とまでいわれるようになる「好色文の達人」だったのみならず、一代男刊行以後の、読者層も拡大して、往来物や中本型の草子が好まれるようにもなるこの時期の、たとえば、

当世は只硬い書物を取置て、あきなひの勝手には、好色本か重宝記の類が増じや　（元禄太平記一）

などといわれた風潮を、如実に示すだろう。通常「五の目録」の名で呼ばれ、以後永く愛用されたといわれる元禄五年刊『広益書籍目録』[1]のこの部門に、浮世草子が最も多く載っている事実を見ても、この部分は、当時色草子とか好色本などといわれた浮世草子が、最も多く記されるようになる部門である。が、遊女・野郎の評判記が基になっていること、及び、武道伝来記や本朝二十不孝、世間胸算用などの好色物以外の西鶴本などは、「物語類」の部門に含まれることを思えば、この部門は、小説的結構を備えた作品を集めた、というよりは、あくまでも楽事、即ち、慰みを目的としたものだったろう。

もっとも、この貞享二年刊の書目は、延宝三年刊『古今書籍題林』の「板木を用いた改訂版」であり、「新に五十丁程補刻し」たその「増補後印本」だ、と云われている。[1] 従って、「物語類」の部門は、延宝三年版『古今書籍題林』下の巻、百九十丁裏の竹斎物語以下、物語名のつく作品七点をすべて削り、その部分に、おちくほ・鶴のさうし・ねこのさうしを入木して、貞享二年版の「舞井草紙」の項の草紙のしめくくりとし、更に、次の丁の表、第一行目にある是楽物語の四字を削って、「物語類」の語を入木し、あらたに新部門を作ったにすぎない。従って、竹斎物語以下田夫物語に至る六点の物語名のつく作品は、[2] 貞享二年刊のこの書目では、新しく彫りおこした板木の最初に並んで、延宝三年版では貞享二年版の「物語類」に相当する部門の最後を締め括る、子孫かゝみ・宝くら・宝鏡物語の前に配列されている。そして又、これまでの書目にはなかった諸国物語以下四十八点の作品を、増補として追加するが、板木を流用して新部門を作るこのような安易な態度は、たとえば、「物語類」の部門にあるさうしの名のつく作品を、「舞井草紙」の部の最後に移動しても、ねこのさうし（五十七オ七行目）や鶴のさうし（五十七ウ最終行）の文字を削って、削った部分は空白のまゝに残し、おちくぼのさうし（五十八ウ一行目）に至っては、削ることも忘れてそのまま残し、草紙の部のその部分もおちくほの四字のみで、さうしの三字を付け忘れる程の杜撰さである。のみならず、「物語類」の新部門を設けても、そこには、一本きく・雪おんな・小夜のねざめ・すみぞめ桜・長者教・子伝抄等々、物語の名のつく作品ばかりが配列される訳でもなく、御伽草子や仮名草子・浮世草子（少々）などの所謂小説類が圧倒的多数を占める中に、延宝三年までの書目そのまま、現在俳諧（宝くら）や格言（逆耳集）・語彙（せわ品草）・蹴鞠（まりの書）などに分類される作品も紛れ込んで、たま〳〵物語名のつく作品の多く並ぶ所に、「物語類」の語を、安易にはめ込んだにすぎない。従って、延宝三年刊書目の「舞井草紙」の部門の御伽草子や仮名草子などの錯綜したままの形が、そのまま貞享二年刊書目の「舞井草紙」の部門にも、「物語類」の部門にも持ち込まれて、夫々の部門の特色をより複雑にしている。その上、御伽草子にも仮名草子にも、物語名のつく作品の多いこと、及び、源氏や伊勢など、当時歌書の一部と考えられた古典に、物語名のつく作品の多数あること、などを思えば、この部門の名が、元禄五年版には引き継がれても、元禄十二年版では消えてしまい、その部分の作品が、延宝三年版以前の書目同様、「舞井草紙」の部門に記載される事になるのも、理由のないことではない。「物語類」の名称自体が、いかにも曖昧な概念だった、と云わねばなるまい。

だが、貞享二年刊書目のこの部門は、この時の増補部分に注目するなら、諸国百物語やとのゐ草、伊呂物語・犬方丈記・一休品物語・小さかづき・宗祇諸国物語等々、仮名草子の増加に伴って、新しく出来た部門だ、といっても、ほとんど誤りではないだろう。しかも、「絶板書」は「削除し始め」た[1]といわれる元禄十二年版では、仮名草子が最も多く減少して、「物語類」の部門も消えているのである。又、仮名草子に、清水物語や祇園物語など、物語名のつく作品の多いこと、改めていうまでもない。

とすれば、たとえ一時期にもせよ、仮名草子の増加に伴ってできた新部門の名が、仮名草子類の作者でもある西村市郎右衛門らに、「物語類」と「呼ばれたという事実に注目し、そのことにこだわっ

て、仮名草子について考えてみるのも、無駄な事ではないだろう。
というのも、この物語の語に注目する時、次のような用例が、先ず見られるからである。

此御物語を承り候も、はや学文にてこそおはしまし候へ。
（清水物語上）

さて〳〵よきがくもんいたし候。もんじにかき申ともつゞまるところは、此ぎりにきはまり候べし。まづ此ものがたりをきき候て、われ〳〵の身のとくになり候。
（女仁義物語上）

学問なくして女の道を知らぬ故なれば、序ながらあら〳〵物語して聞かすべし。
（新薄雪物語一）

等々。仮名草子の文学史的特徴の一つが、当時の学問である儒仏の啓蒙にあること、既に周知の事実だが、学問の語に関連していえば、たとえば、

武芸を習ひてのち学問すべしといふ事、もっともよし。行余力ある時は文をまなべとかや、論語にあり。行とはをのれ〳〵の身のふるまひなり。それに手透あらば文学をいたせと也。
（可笑記評判四）

今の出家衆は、わざと京へ儒学ならひにさへのぼり申に、とも〳〵、儒書の文学でもして御ざあれ。
（儒仏論聞書上）

もとよりせいけんのなをえしぶんがくのによしありといへども、この人はまた世にまれなり。
（本朝女鑑十一）

などと云うように、当時、第一級の文学は即ち学問だった。それはおそらく、文学の語が、

されば将たる人は生得の才智あり共、かねてはすこし文学をたしなみ、文盲ならぬほどにすべし。
（古老物語二）

我儒は、まことに文学のうへについて少もかざらず、おしゐたり。
（由来明鑑集一）

等々、文章、しかも、

文学の理もきこえかたくよむ事のならぬ書物は気のどくと思はゞ、かなものにいかほども道理のわかりたる草紙の物おほし。
（可笑記跡追四）

学文と云は、文学をしり、漢書を学はかりか学文にあらず。
（可笑記跡追四）

などのように、文章は文章でも、先ず漢文をさしたからだろう。そしてそれは、当時の学問が、学文と記すことでもわかるが、自然や社会の事象を、物事に即して、直接的に調査実験し、研究する事ではなく、ワンクッション置いて、しかもすぐれて人文的に、古の聖賢の書物に記す文に学ぶ事だったからである。従って、文に学んだ必然の結果として、「がくもんをこのみて、おほく文章をなんつくりける」（見ぬ京物語中）といった今日の意味での文学的行為（即ち、極端な場合、文そのものを目的にして、必ずしも内容にかかわらず、美文名文、あるいは戯文を作ること）へとも、つながってゆく。明治の始め、「日本で初めてヨーロッパ諸科学の概説を試みた」西周は、「レトリック（文学）」と考え、「literature を「文学」とすべきか「文章学」とすべきか、大変迷ったようで」、文学の語に「ストレートに literature の訳語がつ」くのは、明治十九年の『和英語林集成』だ、といわれている。そして、そうしたことを御指摘になった鈴木修次氏は又、この辞書では初版以来一貫して、この語を、「特に中国古典の学習をいう」と説明していることに興味を示され、

中国では文字にまつわる学問を一口に「文学」といってきたのだということを、助手をつとめた人が承知していて、その説明を「文学」の解説に一貫してつけるようになったのだと考えられる。

と云われている。[3]

従って、文学の語にこだわるなら、次のような文脈にも注意しなければならない。即ち、

此書を以て師とたのみ、おのづから文学の才子ともなるべし。（外題鑑）

まことにとしたけ、よはひかたむきたる人なりとも、才智つたなく文学あつからずんば、むく犬のとしよりたるに、さらにことなる事あるべからず。（理屈物語）

文学才智もなく大欲無道なるは、これ人倫にあらず。（可笑記評判七）

等々。つまり、「文書を見ても読分されば、其理りをしらず」（悔草上）の言葉通り、文学にかかわる為には、必然的にそれ相当の才能が必要となり、「文学あれば、名を天下にあぐ」（安倍晴明物語七）などといわれた当時、学問本来の目的は、聖賢の書に学んで、「我心のひがみをなをして」（嵯峨問答下）、「心徳」（続つれづれ草上）を明らかにし、「天理本源の性」とも「本覚真如」ともいわれた、「本心の玉をみがく」（可笑記三）事だったにもかかわらず、「文をまなび学をつとめ」（可笑記評判七）て、いたずらに博覧強記を誇り、名聞利養を求めて他と争い、「学者はあれど文学訓話のみ也」（儒仏論聞書下）といった状態に陥る者が多かったのである。従ってそうした状態は、たとえば、次のように非難されることになる。

ひろく文をまなび、学をつとめ、才智ありて、しかも文字にくらからずして、その心ざし、身のおこなひ、奸曲佞邪に、大欲無道に、慈悲のおもひなく、むごきふるまひあらん人は、天下のために何の益あらん。愚にして、無道なるは、障すくなく、才智文学あって、無道なるは、政道の邪魔となり、物をそこなふ事はなはだし。（可笑記評判七）

と。のみならず、「才智文学」あるいは「才学」への不信は、「才能は煩悩の増長」したものにすぎず、「才智芸能ある人」は、「他にまさらん」と「心をなやましくるし」めて（寂寞草新註一）、「智慧」は却って「偽り」の種となる（他我身の上六）、とさえ云われるようになるのである。が、

小智小見の人は、一偶に泥で、造化の広大を、知らざる故に、他のために、まどはさるゝ事多し。（飛鳥川下）

などとも云うように、人一人の智恵には限りがあり、しかも「知覚は心の明」（他我身の上二）であるなら、学ぶことは捨てられず、学問は道を学ぶことと、文を学ぶことに分離する。それを用例で示せば、次の如くである。

学文をすれば、心だてこびくねりいな物になるといふ事、是わろく成まじきにもあらず。その故は、学文と学道との替りあり。（可笑記評判七）

されば、学をつとむるといふは、あながちに四書六経諸子百家仏経祖論神歌医方の書籍をよみて、其義理をとりあきらむるといふにはかぎらず、只本心をとりおさむるをもって詮とすべし。学に二種あり。一には文学、二には道学也。（可笑記評判四）

畢竟は、四十五十よりは道をつとむる事を簡要にして、才芸は等閑なれとそ。されど道学だにもおこたらずば、又才芸をもすつべからず、ときこえたり。

（寂寞草新註三）

学文―文学―才芸に対して、常に学道―道学―道学の語が、対になるという訳ではない。文学は「文道」（釈迦八相物語四）ともいわれて、「文学学道」（伽婢子三）、「学文得道」（可笑記跡追四）のようないい方もあるが、最後の用例の才芸は才学、即ち、当時芸能の一種にすぎなかった学問（学文＝文学）の姿を、如実に示すだろう。従ってたとえば、

孔子のたまはく、行に全力あるときは、もって文をまなべといへり。忠と孝とは道の本なり。親に孝あり君に忠あり。これをおこなふを人たる道とす。その間の隙には文学をも心がけよ。文学もなを人たる道をしらしめんかためなり。

（可笑記評判四）

などというように、道を行う者にとって、「読書学文」（続つれ〳〵草上）より、日常の行いこそが眼目なのであり、本来のそうした考え方にそって、書物に「まなぶ」「いとま」もなければ、又従って、生来の才智を育てようもない「農工商」（一休品物語）や侍は、「家職の透〳〵に」、学文をした人に近づき、「先賢の物がたり」や「君子の心ざす所」を「尋ね問い」、「聞」いて学ぶ（可笑記評判四）ことが、奨励されたのである。

そしてこれが、先ず、この章の冒頭に示したような学問と物語との関係である。

だが、

よみ物よまぬとて、学文のならぬ事とは聞え候はず。たゞ、ことはりをしり、其身のよくなるを学文とすべし。

（清水物語）

いかほどしよをよみても、だうりのしらぬはよまぬにもおとれり。

（女仁義物語下）

とはいっても、こうした物語が、書物と無関係だ、というのでは勿論ない。物語の語は、「つもる物語」（大坂物語）、「思ひ思ひの物語」（恨の介上）、「よもやまの物語」（露殿物語中）等々、話とほとんど同義だが、『囃物語』（延宝八刊）の序には、単なる「戯言」を「咄し」とし、「話とは出書正しきをいふなるへし」と定義する。実際、この作品に「収める咄に」典拠は示さないが、「対応する物語」にはすべて「出典を明記している」のである。そして、鋭くもこのことを御指摘になった岡正彦氏は、「咄と物語の一つの区別をして見せた点で史的に注目される」といわれる[4]が、

たとへをとりてものがたり申きかせたてまつらん。

（女五経三）

長〳〵しき物かたりなれとも、たとへをとりて申侍らん。

（理非鏡中）

などという場合の「たとへ」も、

柏木の譬は戒めの物語

（新薄雪物語三）

あるいは又、

上戸の貴人に近づきしためし、本朝のみにあらず、異朝にも其例おほし。粟田真人は、則天皇后にまみへ、麟徳殿にして酒宴をなせり、と唐書に侍り。東坡が宣仁皇后の御前へめし出されしも、みな是酒の徳なりと、宋史に云りといふ。

（よだれかけ四）

経の中に五倫をとき給ふ事を、物かたり申さん。仏のいましめの中に、国王の制法にそむく事を、一戒として説給ふ。或は護国仁王経なと申経もあり。これ君臣の倫なり。或はわれ孝行により、仏とはなるとも。又父母恩重経には、父母の十恩をのへ、摩耶報恩経と申もあり。　（祇園物語下）

等々、「出所のおぼつかなき故事は引給ふまじき義なり」（ぬれほとけ二）の言葉通り、その物語が、根も葉もないいい加減な咄しではないという「しょうこ」（水鳥記中など）に、先ず、「心ある人〳〵」が、「人のため末の世のために」と「書き」おいた「物」（にぎはひ草上）、即ち書物から引くのである。従って、先行文献を引用して物語る場合もあれば、又、引用したたとえが、即ち物語になる場合もあるが、学道も確かな学問であろうとする限り、文に学ぶことから自由ではないのである。とすれば、典拠のある話（物語）は、そのまま文学だ、と云ってもよいだろうか。

ところで、『嚏物語』の場合は、土佐日記や徒然草をも含む「和漢の諸書」を典拠とするが、当時の文学が文に学ぶことであり、その文が漢文であるなら、引用しよりどころとする書物も、漢籍である事が、最も正しいあり方だったろう。たとえば、『智恵鑑』（十巻十冊）の二百話は、出典は明記しないが、「明の馮夢竜の『智嚢』に主として拠り、『内訓』『史記』などにも説明を仰いで、智恵の鑑とすべき説話を和解したもの」[4]であり、出典を明記した『見ぬ世の友』（五巻五冊）二百二十一話は、古今事文類聚を中心にした四十点前後の漢籍の「かなり忠実な漢文訓読調の和訳」、『語園』（片仮名）を、更に「意訳体の和文」にした平仮名本である。[5]が、『理屈物語』六巻六冊には、「和漢の故事九十四話を収める」が、「中国種の故事には出典を明記して」も、

和のことは古老の吻語（フンゴ）、吾済（ワナミ）の旧聞にまかせぬれは、拠（ヨンドコロ）をしるすへきにもあらす。　（後序）

と断言して、本朝の故事には出典を示さない。

そこで、この文という事に注目すれば、

文のことばは千早振神代よりつたはれるにもあらず。ことさへで漢文にまねびてこゝのことばにつくりなせるものなるを。　（つくり船）

などと云うように、本来文字をもたない我が国には、文というものはなかった、といってもよいだろうか。

おとこもすなる学文といふことを、女もすべき事なれど、我朝のならひとして、女の学文はせぬことなりと心得て、もろこしのたゞしき文をよます、この国にてつくれる物語さうしなどいふものをのみもてあそひ侍りぬ。　（女四書序）

これはもろこしの文にのせたる事にもあらす、又和朝にかたりつたへしふるき物かたりにもあらす。　（見ぬ京物語下）

などといわれる如くである。（漢）文に対して物語の語のあること、既に見てきた通りだが、今「物語さうし」の草子の語に注目するなら、「からのやまとのさうし」（賢女物語）、「和漢の双紙」（不可得物語上）等々、この語は本来冊子を意味するようだが、「さうし」の「さう」は「草」に通じ、

（徒然草の、筆者注）草は草子也。いまた清書せぬ下書と云也。　（寂寞草新註一）

跡さきあはぬ文章の双帋　（堪忍記二）

うき草の根もなき事を、草紙に書あつめ侍りし。
（ひやう三）

此草紙を、手ならふ子どものもてあそびに書加へたり。
（杉楊枝六）

これ身のおこなひのためにもならず、心をおさむるたよりにもならぬわけもなきさうし
（本朝女鑑十二）

のように、「儒仏二道の書籍」（可笑記評判八）・「もろこしわたりたるしよもつ」（女五経）・「本草綱目・事文類聚等の書」（秋寝覚二）など、書籍や書物・書（フミ）の語に対して、本来一段低い言葉のようでもある。従って、次のように使い分けるのも理由のない事ではない。即ち、

学ひろきをいとはす。いかに仮名物なれはとて、よまさるへけんや。中華朝鮮よりわたれる書にも、あさ〳〵しきもあり、倭の草子にも理のふかき侍るものを。
（嵯峨問答序）

みちのをしへたるさうしにはまづ、堪忍記・智恵鑑・女四書・本朝女鑑、かやうのたくひよませならはしたまふべし。みなかなものなれば、よめるにてうはうなるものなり。（中略）もろこしわたりたるしよもつあまたあれど、これは女のよみがたきものなればりやくす。
（女五経）

いとまある日は、まことしきふみよみならひ、又わが国の草子どもこのみてよみて、其中にて忠孝のせちなる跡にあへば、ふかく心を感じ面にもあらはれけり。
（本朝孝子伝下）

等々。つまり、「もろこしわたり」の漢字（真名）で書いた「たゞしき文」「まことしき文」に対して、本朝にしかない「仮名物」は、それがたとえ「理」を示す「みちのをしへ」を記していようと、使義には「さうし」だ、というのである。それは、「舞井草紙」のような云い方や、「書籍・双紙・能狂言・世間の噺」（可笑記評判一）などの序列が示すように、あるいは又、「歌草紙」（伽婢子三など）、「さうし物語」（可笑記五など）、「物語さうし」（世諺問答下など）の語が端的に示すように、草紙の語は、わが国における本来の文字（漢字）と音声言語の中間、即ち、真字（マナ）ではあっても、中国の文字である漢字では表現し得ない、「此国に生をうけ」た「もの」の、心の奥の微妙な真実を言い表わす歌（にぎはひ草下）や物語を、仮名で書き記したものの意だ、と考えるからだろう。だが、「からやまとの文」（めさまし草下）のような語があるのは、和製の漢籍以外に艶書をも文というように、仮名書であろうと文字化したものである限り、「西蕃（カラクニ）に」学んで「本朝のことばにつくりな」した「書（フミ）」（つくし船）、即ち書籍に違いない、という以上に、当時草紙に記されるものを、本来次のようにも考えていたからである。

うたひ・まい・平家物語、よろつのさうしなとも、経論、しやくもんの有難きことを引出して、つくれる物なれは、たつときこと、おほし。
（為愚痴物語二）

それよりしたいにかきそへて、五十よでうのさうしとなし、ひかるげんじの物かたりとなつけたり。（中略）天だいの六十くはんのしょになぞらへて、五十よでうにわかち、ぶんのほうは、しきといふ文（ふみ）にかたどり、にほんきによせてしるせり。
（日本名女物語五）

ひきことのおもしろきには、昔よりこのかた記しおきたる和国草紙に、諸子百家の事、仏教などひきあはせたるおほし。
（清水物語序）

等々。「和国の風俗」（女郎花物語中）とも「和国の道の根源」（にきはひ草上）ともいわれて、本朝の故事の中でも特に尊重された歌も、「がくもんよくつとめ、うたのみちかんおうなり」（本朝女鑑九）などというように、仏教や儒教同様（可笑記評判四など）、「邪念妄想をのぞきて」（めざまし草下）、「有為の無常をしり、真理のさとりをひらく」（続つれ〴〵草上）以外の何ものでもない、と考えられていた。従って、本朝の書も、古典に限らず、当代の信長記（以我蜂物語上）や女郎花物語（よだれかけ二）に至るまで、「和漢の故事」の一つとして、物語に引用利用することになるのである。[6]

そして、この不確かな語り（音声言語）の世界に、確かなもの、証拠として利用する故事、又は先行文献は、「古事本説」（あた物かたり上など）、「本文」（諸虫太平記下など）などとも云われるが、それがたとえ類書や啓蒙的仮名抄からの安易な利用であろうと、「本説」（由来明鑑集一）、即ち「みなかみ」（長者教）へ帰り、そこから出発しようとする態度は、「五本立て道なり」（可笑記評判五など）と云い、

人はたゞ学文において身をくだき、本心の玉をみがくべき事、かんようなるべし。（可笑記三）

といった当時の学問の姿勢と、無縁なのではない。それは人に限らず、たとえば、

正月に、かとに松竹をたつるゆへもや候らん。御ものかたり候ひてきかせ給へと申けり。（松風むらさめ中）

由来を語りて聞かすなり。（中略）夫此器の根元を尋ぬれば……（杉楊枝三）

和歌の事は、よみはよめとも、大かたに、こゝろうるはかりなり。いつの世よりはしまり、いか成いはれ候やらん。（鴉鷺物語上）

等々、「物の本理」（杉楊枝六）を知り、確かな「起本」（よだれかけ一）を理解するのが、「ものの本」に学ぶ当時の学問の基本的なあり方だったからである。それは、神仏の本地を語る中世以来の本地物の世界にも通じる、といえようか。

従って、「なに事も、めにみる事を本とせよ。きゝぬることは、かはるものなり」（長者教）とはいっても、確かに「めにみる事」のできる文に学べばそれでよい、というのではなかった。というのも、先ず、「万物のたましゐ」といわれた「人」（由来明鑑集一）にのみ許され、物語を可能にする言葉自体が、「ことのはを学〴〵と思ひしに、まことの道に入そうれしき」（似我蜂物語上）などというように、お互に人と認め信じ合う人と人との本来の心、即ち「本心」の行き通う「道」以外の何ものでもないからだろう。しかも、既に見てきたように、文、即ち「文字は、道をのするうつはもの」（他我身の上四）でも、「道は文字のうへには」なく「心にこそあ」り（同上）、人が「有真」の「文字」（草茱物語下）に執着して、本来の心、即ち「本心」を忘れる時、「人のために文字は」必ずしも善ではない（芥物語下）、と考えるからである。だが、

をろかなるは聞てまどひ、見ぬをうたがふ。かしこきは心におさめけるをあきらめ、鳥の跡をのこして、おしへをたれ、いましめとす。千代よろつ世にわたりて絶ることなし。（犬はりこ序）

などと云うように、「文字」も「なけれは読へき双紙もな」い「上代」、古の聖賢が直接天に学んで身を以て伝えた（清水物語上）「むかし

よりの事をも、しり、のちの世の事までをもしる」のは、やはり「もじ」を「たより」とするからであり、その意味で、「文字もぼだい、ぼだいも文字」（同上上）といわれる程に、「世俗の文字」は「なを真理」（紀物語下）だ、というのである。従って、

人生れながらにして、物しれることなし。をしへをうけてこれにつとめ、かしこきよりかしこきにうつすへくは、そのしるしなかるへきや。こゝをもって、古への聖賢あはれみをたれて道をつたへ、筆にあらはして、後の世にしめし給ふ。

（堪忍記序）

孔子は天地、万物を約やかに調へて、仁・義の五つの文字にて衆生を匡ひ給ふなり。釈迦は三世・浄土を立、数多の経意を編み立てゝ、広きを集め調へて、文字の名号・妙法の、六字に約めて衆生をば、済け給ふぞ有難や。

（ぬれほとけ中）

などの言辞は、「文といふは仁也」（草莱物語上）の真理を、如実に示すだろう。

のみならず、「仁は五常のつかさ」（他我身の上三）であり、「学問トイフハ（中略）、此仁ヲヨク求メ得ンタメノ義ナリ」（孝経大義講草鈔二）というのであれば、太平の世ではあっても、たとえば、延宝三年毛利文八刊『書籍題林大全』に著録する仏書の発行部数が、一割にも及ばない儒書を遥かに超えて、四割強も占め、

時うつりぬればよき事が、みなあしき事にへんする物にて候。

（清水物語上）

いきとしいけるもの、すへの世となりては、私欲をもつばらとし、あらそひがちに、なり侍るにや。

（小屁一）

何事もふるき世のみそしたはしき。今やうは無下にいやしくこそ成ゆくめれ。

（にぎはひ草上）

などといわれた「末法」の「今時」（紀物語上）、人が「人のため末の世のために」と「書」き遺した文（にぎはひ草上）に学んだものを、もう一度、しかもよりわかりやすく親しみやすい物語の文に直して、即ち「和語に平し、和字にならべて」（戒殺物語序）、人に返すのが、一人では存在し得ず、それ故にこそ、「仁亦人也」「仁字分用則二人也」（不可得物語下）などといわれた人本来の姿だろう。

かくして、「むかしの本に、すたれるあらば、板にちりばめよかし」（芥物語中）と云い切る程に印刷術が発達し、書肆には、「寺社内の印刷関係者から出たもの」が多い、といわれた当時、文に学んだ物語は再び、一瞬の浮世のより多くの「無明の闇」（驢鞍橋下）に迷う人の「本智」（ぬれほとけ下）、あるいは「良知」（続つれ〴〵草上）を啓くべく、陸続と刊行されるのだが、今この仁の語に注目すれば、

儒教には仁と名づけ、仏道には慈悲と名づく。打まかせて物をあはれむといふ。

（可笑記評判十）

などといった用例をみるまでもなく、仁が慈悲に通じ、慈悲の心は又、生きとし生けるものの「生死無常を観する」「物のあはれ」（寂寞草新註二）を知る心にも通じること、改めていうまでもない。

このほど万物がたる序、僧ふた巻のかんなざうしを出し、是は昔、此所にてかう〳〵のふしぎありしを、書し物に侍り。此まへなる墓は、其なき人のしるしに侍りと、始終を語り給ふに、いと哀なる事のみ。しらぬ我さへ袖しぼる斗。乞請帰りて披みれば、始はえんに半ば情ふかく又哀に、男女のまどひの深き事を示し教ぬ。我独灯のもとに詠むよりはと、梓に物して、世の慰草となす。

（初時雨序）

等々、「慰草」でもあった「仮名草子」の世界では、「事の心」を「弁」ることと、「ものゝあはれを」しることとは同じであり（諸国心中女四）、ここにおいても、当時の学問と文学は何の矛盾もないのみならず、「慈悲の立場」は、人我の差別を超えて「自他不二の理にもとづ」き、「物我一体「だ（反故集）というなら、それは又、「一点の私」もない「天」（嵯峨問答下）の心そのものであり、そのように「天道自然の本性」（寂寞草新註一）に帰って、「私なく、物に任せて自由」（万民徳用）な大自在の心境は、「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」（赤雙紙）と教える芭蕉の文学観にもつながってゆくだろう。「ことはりせめてあはれなり」（名女情比四など）の言葉通り、学問の極った所に、今日的な意味での文学もあるのである。

従ってその意味でも、仁勢物語など、古典の単なるパロディは、文に学んだ文が、文そのものとして学問から独立し自立しようとする文学独自の姿を示すようにも見えるが、それは又同時に、文が文に溺れ、道を失って一種危い文学独自の姿を、示すようにも思われる。だが、「文」は「みちのうつは物」（芥物語上）でしかないということ、即ち、「道は文字のうへには」なく「心にこそある」のだ、という考え方からくる物語と心の重視は、やがてもう一歩進めて、文にかかわりながらも、物語ならぬ「話の姿勢」で、現実の人間を鋭く見すえて「世の人心」を語る西鶴という大輪の花を、浮世の草子の世界に送り出すことになるのである。

（注）

(1) 阿部隆一「江戸時代書林出版書籍目録解題」（『江戸時代書林出版書籍目録集成』）

(2) 七点のはずだが、若衆物語がぬけている。

(3) 「「文学」の訳語の誕生と日・中文学」（古田敬一篇『中国文学の比較文学的研究』所収）。氏は又、

中国では「文学」の「学」にアクセントが置かれて、文字にたよる学問一般の意に「文学」の語を使用する習慣がしだいに顕著になってきた。

といわれ、前漢の武帝以来「文学」は官名として使われたことにも触れられ、「文学」の語には、「経籍を中心とする学問を主としていう場合」と、「文章の面にアクセントを置いていう場合」のあったことを御指摘になっている。

(4) 『日本古典文学大辞典』

(5) 吉田幸一「『語園』『見ぬ世の友』解説」（古典文庫『語園』）

(6) 仮名草子に仮名草子を利用すること、三浦邦夫氏「『可笑記』と『清水物語』―その接触をめぐって―」（秋田高専研究紀要7・7号号、昭47・1）・渡辺守邦氏「仮名草子における典拠の問題」（『仮名草子の基底』）参照。又、本朝の和文を利用する際、それは本来の文ではないという意味で漢籍とは必ずしも同等ではなく、直接の出典が不明な程に自由なより方をしていることも多々あるようだ。が「俗説に」「世話に」という場合も含めて、先行文献にあるかと先ず疑ってみるのが、仮名草子の正しい読み方だろう。

(7) 渡辺氏は、「『可笑記』と講釈」（同右）の中で『可笑記』の文章が、「同義語の多用と俗語表現をまじえ」た「語りの口調」で記されているにもかかわらず、そこに活用する例話は「座右に『沙石集』や『徒然草』『甲陽軍鑑』『清水物語』あるいは『巵言抄』『童観鈔』など」の書籍を置いて、直接それらによっている、と見事に立証されている。

(8) これが儒者の文学観であること、中村幸彦先生は「幕初宋学者達の文学観」（『近世文芸思潮改』所収）の中で詳述されている。

附記 書目調査に関して、多治比郁夫氏、及び大阪府立図書館・慶応義塾大学附属図書館の方々にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。